末松遺跡

石川県農業短期大学附属農業資源研究所
増築等工事に係る埋蔵文化財調査報告書

1989

石川県立埋蔵文化財センター

末　松　遺　跡

石川県農業短期大学附属農業資源研究所
増築等工事に係る埋蔵文化財調査報告書

1989

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は，石川県農業短期大学附属農業資源研究所増築等工事に係る末松遺跡〔『石川県遺跡台帳』末松Ａ遺跡（1207－縄文，1208－平安）〕の発掘調査報告書である。調査地は，石川県石川郡野々市町末松３丁目235番地，238番地にあたる。

2　調査は石川県農業短期大学の依頼・費用負担により，昭和62年４月20日～同年５月29日に石川県立埋蔵文化財センター（担当，北野博司）が実施した。

3　発掘調査の実施にあたっては，石川県農業短期大学事務局長，同庶務課，同農業資源研究所，同実験農場の関係者，関係機関の協力を得た。

4　発掘調査の調査員・作業員は以下のとおりである。

調査員　池腰博之，作田昭雄

作業員　酒井　潔，西本悦雄，吉田栄次，古源きよ，吉本智子，栗山　久，西本光江，松本のぶ子，中村　操，北村三千子，畠二三子，久保田久子，藤田美和子，北岡裕子，熊沢常子，横山美弥子，中山外喜子

5　本書の執筆・編集は北野が行った。

6　本書で用いる方位はすべて磁北，水平基準は海抜高（m）である。

7　出土品，記録資料等は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

本文目次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
　1　遺跡の位置と社会環境 …… 1
　2　遺跡の立地 …… 1
　3　扇状地扇央部の開発 …… 3
第２章　調査の経緯と経過 …… 5
　1　調査の経緯 …… 5
　2　調査経過 …… 6
第３章　遺　構 …… 7
　1　層序・旧地形 …… 7
　2　遺構の概要 …… 9
　3　「道」 …… 9
　4　「畠」 …… 10
　5　掘立柱建物 …… 12
第４章　遺　物 …… 13
　1　調査区の遺物出土頻度 …… 13
　2　縄文時代 …… 14
　3　古代前期 …… 14
　4　古代後期 …… 16
第５章　若干の検討 …… 18
　1　縄文土器・打製土掘具の出土頻度 …… 18
　2　古代土器の供給圏 …… 18
　3　畝状遺構 …… 20

挿図目次

第１図　遺跡の所在地 …… 1
第２図　末松遺跡の位置 …… 2
第３図　発掘調査地点と周辺の遺跡 …… 3
第４図　過去の分布調査と今回の発掘調査区 …… 5
第５図　調査区土層断面図 …… 7
第６図　遺構実測図 …… 8
第７図　遺跡地の土地利用概念図 …… 9
第８図　溝土層断面図 …… 10
第９図　畝状遺構と周辺の微地形 …… 10
第10図　畝状遺構配置想定図 …… 11
第11図　出土遺物実測図 …… 15

表目次

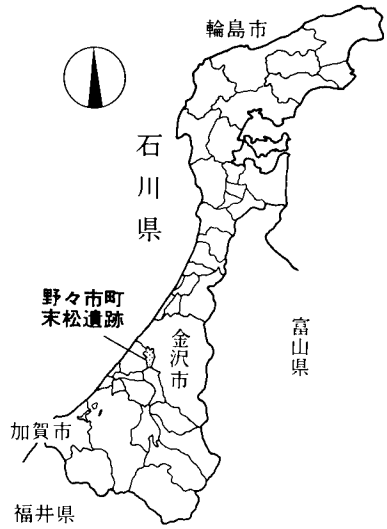
第１表　出土遺物の分布 …… 13
第２表　打製土掘具一覧表 …… 14
第３表　須恵器の個体識別と産地 …… 19

末松遺跡周辺の航空写真（第３図参照）

第１章　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と社会環境

末松遺跡は石川郡野々市町末松１丁目・同３丁目地内に所在する。県都金沢市の中心部からは南西へ約８kmと至近の距離に位置している。野々市町は町域13.45㎢，人口は約３万５千人，県下では最も人口密度の高い自治体で，町の北東部を中心に商業地として発展するとともに，金沢市のベッドタウンとして宅地化が進行して市街地は膨張しつづけている。交通網も整備され，北部にはJR北陸本線，国道８号線，中央部には国道305号線，東部には国道157号線，北陸鉄道石川総線，南部には加賀産業道路，と主要幹線が通り，沿線を主体に急激な開発が進行する中，かっての加賀の穀倉地帯の一部を占めた美田は次第に失われつつある。



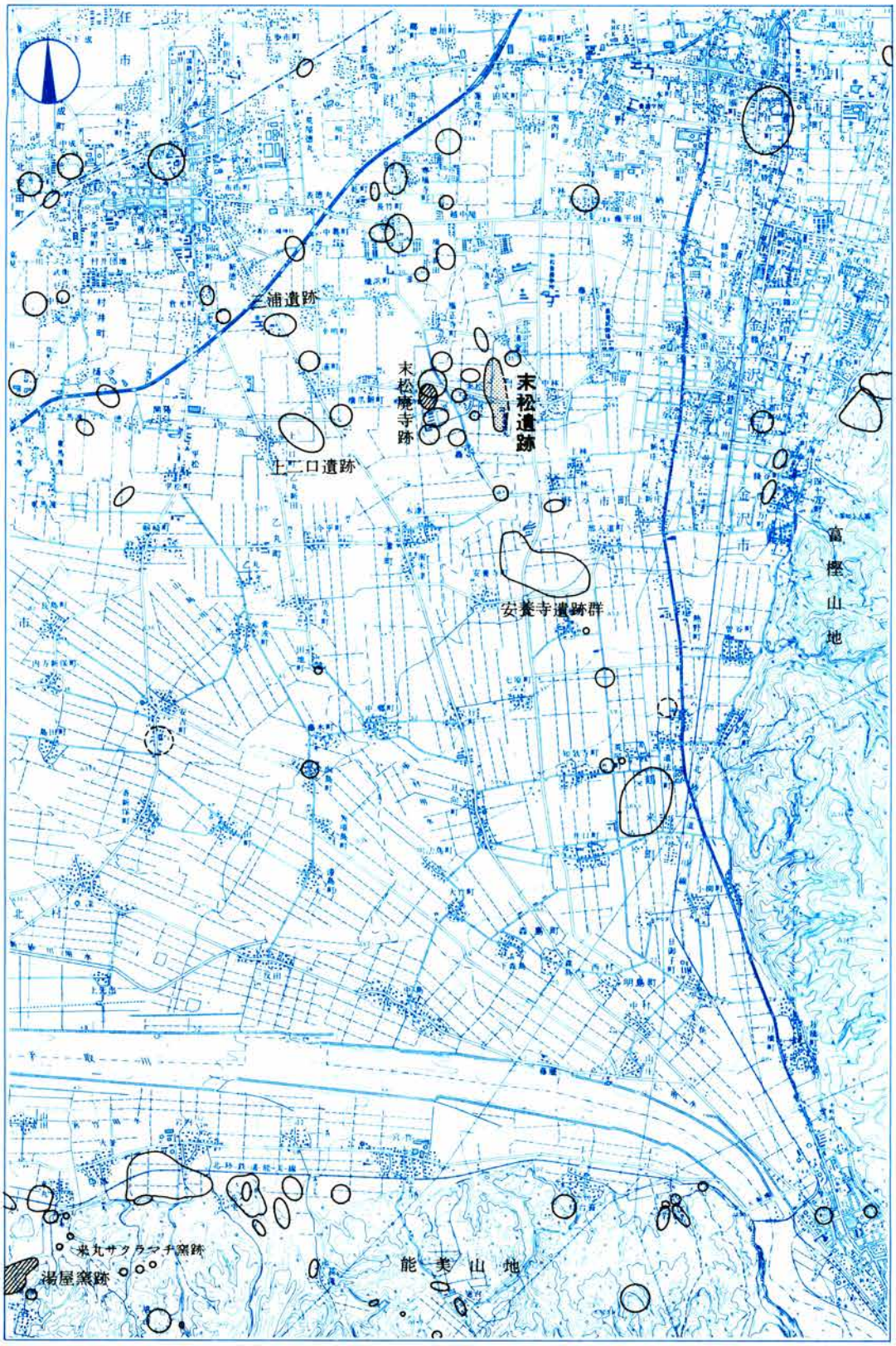
第１図　遺跡の所在地

本遺跡の所在する末松は野々市町の南西隅に位置し，これまで中心部の開発の影響はさほど及ばず，のどかな田園地帯の景観を保っている。しかし近年，加賀産業道路沿線での住宅団地の造成や先端技術産業の工場進出などにより，周辺部は変貌を始めている。そんな中で現在，本遺跡の中央部を縦断する国道157号線鶴来バイパスが建設中であり，この水田地帯にも開発の波が押し寄せる日はそう遠くなさそうである。

２　遺跡の立地

県下最大河川の手取川の形成した扇状地は，標高約90ｍの鶴来町を扇頂とし，北西方向に約110°開き，扇径12kmの規模で，扇端を日本海に接する。手取川扇状地は，また県内最大の平地でもあり，松任市や野々市町など，１市７町の大部分を含んで石川平野の主要部を占めている。

末松遺跡は標高35～42ｍの手取川扇状地扇央部に立地する。東西約150ｍ，南北約600ｍの広がりが推定されており，西方約500ｍにある国指定史跡末松廃寺を含んでひとつの遺跡群を形成している。これらは，南遷した手取川の旧河道を示すといわれる七ケ用水のうちの東から２本目，郷用水系に位置する。遺跡群の南方，標高40ｍ以上の上流寄りでは，各用水間に帯状に連なる島状の地形が顕著に発達するが，本遺跡群の付近では比較的不明瞭となって起伏は乏しくなる。しかし，当地周辺においても発掘調査などの所見によれば，規模は小さいが基本的には，用水のいくつもの支流が通る旧河道間に南北帯状の島状微高地が形成される，といった地勢を示しており，末松廃寺跡は，南約1.4kmの付近で分派した郷用水西川と中川の間，本遺跡は，中川と更にそれから東へ派生した河道との間にそれぞれ立地している。表土は黒褐色土－黄褐色土で，基盤礫層

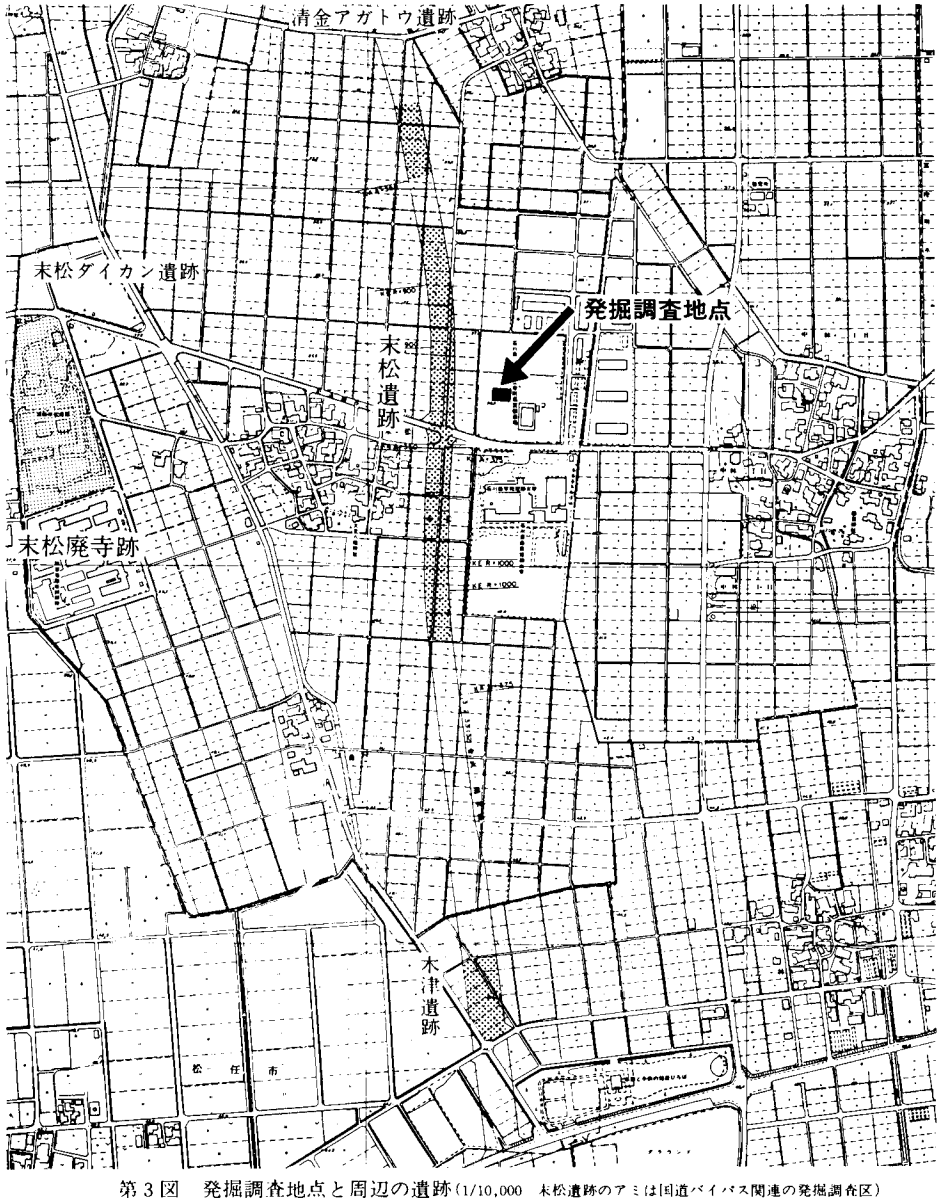


第２図　末松遺跡の位置（S＝1/50,000）

上面に60～100cm前後の豊富な層厚を持つ。ただ遺跡の南方は礫層が高く，明治年間の地籍図では，塚状の残丘が多数認められ，「石田」「諏訪野」「長塚」「塚田」などの小字名を読みとることができる。

3　扇状地扇央部の開発

手取川扇状地への古代人の本格的な進出が始まるのは，縄文時代後晩期頃で，扇端北部（標高約10ｍ）には御経塚遺跡，新保本町チカモリ遺跡，中屋遺跡など大規模な集落跡が展開している。扇央部では現在のところ集落跡は未確認で，わずかに長竹遺跡（北西1.5km，標高28ｍ）で晩期最終末の土坑群と比較的まとまった量の遺物が出土したにすぎない。ただ，国道バイパス関連の



第３図　発掘調査地点と周辺の遺跡（1/10,000　末松遺跡のアミは国道バイパス関連の発掘調査区）

調査などで明らかとなりつつあるが，晩期の土器と打製土掘具が広域にわたって散発的に出土するあり方は，扇央部開発の一段階を示すものとして興味深い。弥生時代に入っても状況はさほど変化ないようで，若干の散布地が知られるにすぎない。しかし，その中で上林遺跡（南東１km，標高45m）は，県内の初期農耕の段階とされる柴山出村式土器を一定量出土しており，低湿地立地を特徴とする該期遺跡の一般的傾向からみればやや異質で注目すべきものであろう。

扇央部での集落跡が確認できるのは，古墳時代後期（５世紀後半）で，木津遺跡[1]（南0.8km，標高43m）があげられる。その他，上二口遺跡（西1.5km，標高37m）では，古墳時代前期の漆町７群土器（『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター1986）併行期を主体とする土器群があり，その集団の性格は問題となるところである。おそらく，弥生時代末～古墳時代初頭には散布地が急増することから規模は小さくとも，いくつかの集落が形成されたと予想でき，この頃に開発のひとつの画期を考えうる。その後の展開は明らかではなく，７世紀前半の河原石積横穴式石室を内蔵した田地古墳（円墳，南西2.6km，標高45m），実態不明ながら末松古墳（南西0.2km，標高38m）と古墳は２基が知られるにすぎない[2]。しかし，前者の存在は，７世紀後半以降の末松廃寺およびその周辺集落群に象徴される当地の古代開発の新たな展開とを結びつけるものとして重要であり，末松廃寺造営時の在地勢力の在り方を考える際にも念頭におかねばならなものである。

７世紀後半は，末松廃寺建立を契機とする大画期で，周辺部でも竪穴住居を主体とする集落跡が発掘調査の結果明らかとなっている。末松遺跡，ダイカン遺跡，上二口遺跡では，８世紀初頭をピークに前半代までで40棟以上が検出され，その分布も寺院を中心にかなり広範に及ぶものと予想できる。在地族長や郡領層によって，組織的な人口灌漑や営農指導の下，面的な開発が開始された考えられる。それ以降は，国道バイパスの調査を参考にすれば，８世紀後半には掘立柱建物の集落にかわり，遺物量などから一旦衰退の兆しを窺うことができるが，和名抄郷にみるごとく，扇央部には「拝師」「中村」の２郷が想定され，扇側の「富樫」「井手」ともに扇状地の耕地は維持されていったものとみられる。

10世紀に入ると，安養寺遺跡群（南1.5km，標高45～50m）や末松廃寺跡などで規模の大きな建物を伴う新たな集落の展開が認められ，周辺部でも散布地が増加する。以後，11世紀代まで隆盛を誇る「拝師」郷一帯の遺跡群の動向は，扇状地の開発に関わって成長していく在地領主の形成過程を暗示していると言え，歴史的にみても重要なフィールドであろう。

注 (1) 1983年県埋文センター調査。三浦純夫氏教示。
(2) 明治年間の地籍図にみられる本遺跡南のいくつかの塚状残丘や関連の小字地名，田地古墳の検出状況からみて，開墾等によってすでに消滅した古墳の存在も考慮しなければならない。

参考文献

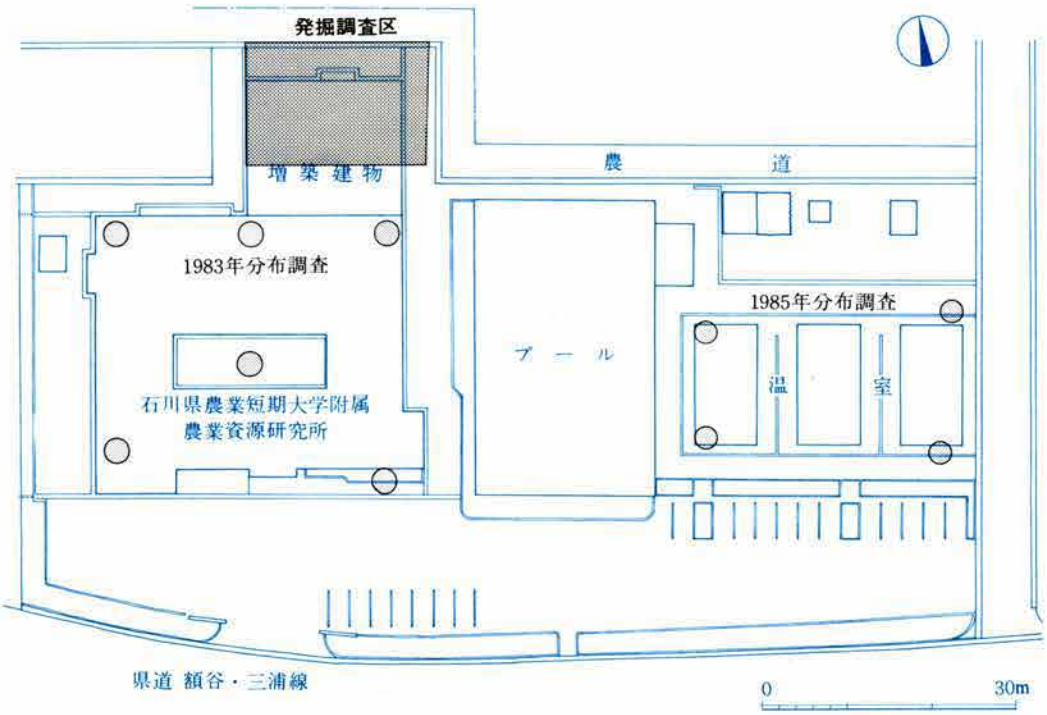
『角川日本地名大辞典　石川県』　角川書店　1981
『手取川七ケ用水誌』上巻　手取川七ケ用水土地改良区　1982
『加賀三浦遺跡の研究』　石川県教育委員会・松任町教育委員会　1967
『史跡末松廃寺－第１次（昭和41年度）調査概報』　野々市町教育委員会・末松廃寺調査団　1967
『史跡末松廃寺跡－第２次発掘調査概要』文化財保護委員会・石川県教育委員会・野々市町教育委員会　1967
吉岡康暢「平野・扇状地の遺跡」『金沢周辺の第四系と遺跡』　北陸第四紀研究グループ　1975

第２章　調査の経緯と経過

１　調査の経緯

本遺跡の調査は，石川県農業短期大学附属農業資源研究所の増築工事に伴うものである。同研究所は，石川県の農業の基礎研究を深く推進する目的で，昭和 59年４月に設立され，バイオテクノロジーを利用した作物育種の研究を行う遺伝資源研究室，空中窒素固定の微生物研究・作物の病害関係の研究・農林業廃棄物の有効利用の研究などを行う農業微生物研究室からなっている。県内にはほかに，石川県農業試験場や砂丘地農業試験場があり，そこでは応用研究・実用化研究を主に担当し，本研究所での基礎研究とあわせて，石川県の農業資源開発の促進に寄与している。21世紀に向けて世界的な食糧危機が懸念される中，バイオテクノロジーの農業への応用には大きな期待が寄せられ，昨今の自然環境の破壊が農薬や合成肥料による土壌の死という面にまで及んでいる現在，自然界の物質環境の要である微生物の研究は必要不可欠といえる。このように本研究所の担う役割は重大で期待も大きく，そのような中で施設拡充が要望され，増築が計画された。

農業短大の校内は，末松Ａ遺跡として『石川県遺跡台帳』に登録されており（県№1207－縄文，1208－平安），過去，昭和58年度と昭和60年度にはそれぞれ，同研究所の建設工事，温室建設工事に伴って，本センターが埋蔵文化財の分布調査を実施している（第４図）が，ともにその存在は確認できなかった。



第４図　過去の分布調査と今回の発掘調査区

今回，同研究所の増築は，既設建物に北接して鉄骨造り平屋建て（288㎡）の建物を建設する計画で，県農業短大の依頼により，昭和61年11月18日，20日に分布調査を実施した（担当，田嶋明人・福島正実・山本直人）。当初の試掘坑の一つで平安時代後期の土師器が出土し，拡張したトレンチ（1×10m）では奈良・平安時代の土器及び時期不詳の溝状遺構が検出された。この結果を受けて，昭和62年4月20日から同年5月29日の期間に，約315㎡を対象（附帯工事分含む）に発掘調査を実施した。なお，調査区西側の用水工事は立会い調査とした。

参考文献　『農業資源研究所年報』№1　1987

2　調査経過

昭和62年4月20日，農業短大庶務課，同農業資源研究所，同実験農場の関係者と現地にて調査区の確認を行い，排土の搬出先，調査器材の保管場所・休憩所の借用等について打合せを行う。4月24日・27日に重機により調査区の盛土および旧耕土の除去を実施して，28日に杭打ち作業を行う。連休明け，5月6日に調査器材を搬入し，掘り下げ作業を開始する。天候に恵まれ，作業は順調に進み，5月11日より遺構検出・調査を始め，18日に終了する。5月19日に全景の写真撮影を行い，器材を撤収する。5月20日より29日まで遺構実測を行い，現地調査を終了する。実働日数22日，作業員は実動9日，延べ107.5人であった。

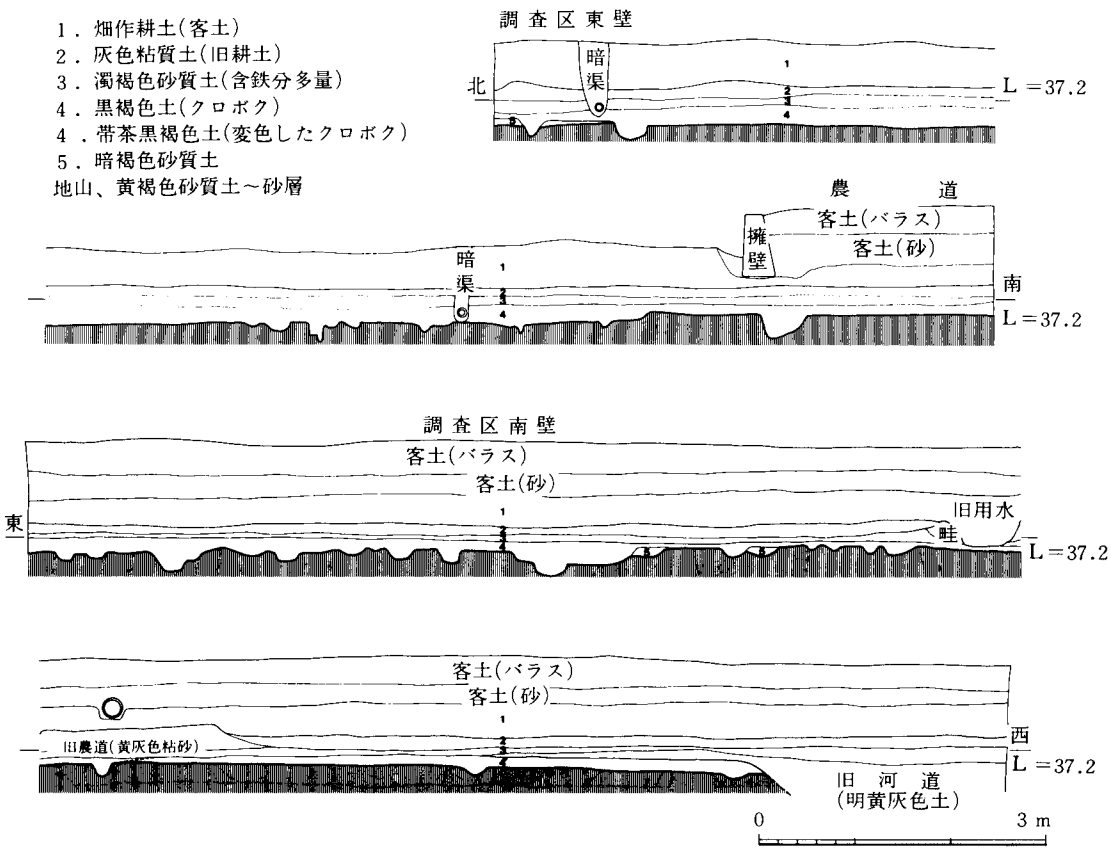
整理作業は，同年6月2日～6日に図面・写真類の記録資料について行い，遺物については，昭和63年度に社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託して実施した。

作　業　風　景

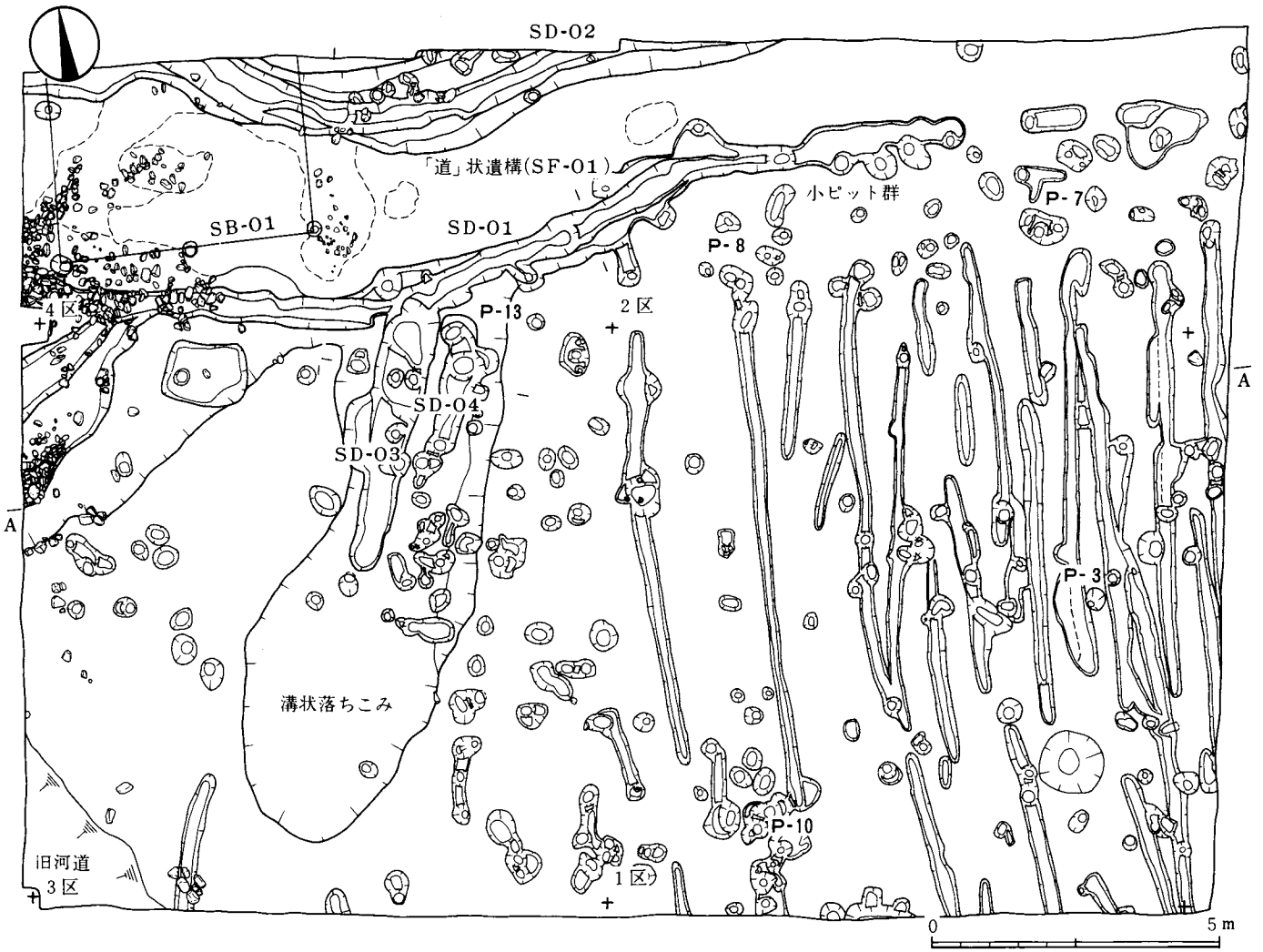
第3章　遺　　構

1　層序・旧地形

発掘調査前の遺跡地は，石川県農業短期大学附属農業資源研究所の実験農場として畑地となっていた。標高は37.8m前後である。実験農場として畑地化する以前は水田地帯で，約40cmの畑盛土下には10～15cmの旧耕土が全域に認められ，南壁の断面図によれば，南北方向にのびていたと思われる農道，付設の水路，畦畔なども確認できる。耕土下は鉄分を多量に含む濁褐色砂質土で床土となっている。その下位には10～20cmの層厚で黒褐色土，通称クロボクが堆積し，古代の遺物包含層ならびに遺構埋土となる。地山は黄褐色砂質土で，東側が高く西側へ緩やかに傾斜する。本調査区の西約50mの地点には，国道バイパス建設工事に伴って発掘調査を実施している箇所があり，ここでは南北帯状に連なる微高地上に古代の集落跡が広く分布しているが，その東側，すなわち本調査区側の方は鞍部となって，近世頃の旧河道の存在も認められる。したがって，集落の側からみれば，背後に微低地があり，更にその先には微高地（本調査区）があるといった地形が復元できる。扇状地扇央に位置する遺跡周辺の地形は，南北の帯状に長い起伏を単位としており，古くから土地利用の面においても様々な規制のあったことが地籍図などから読みとれる。



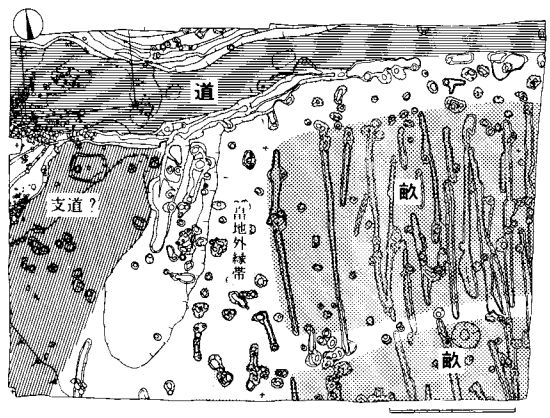
第5図　調査区土層断面図


SD-02
「道」状遺構(SF-01)
小ピット群
P-7
SB-01
SD-01
P-8
4区
P-13
2区
SD-04
SD-03
A
A
P-3
溝状落ちこみ
P-10
旧河道
3区
1区
0
5 m

第6図　遺構実測図

2　遺構の概要

遺構の配置は，時期の複合が少ないため比較的単純である。大まかに3ブロックに分けて考えられ，北辺の2区から4区にかけて存在するSD－01･02とその間の「道」状遺構と考えた部分，南東よりの1区で，幅30cm前後で南北に長い溝が多数存在し「畠」と考えた部分，それと溝状の落ちこみを挟んで地形が一段低くなった3区西半，支道ないしは空間地と考えた部分である。これらは配置関係，出土遺物などからほぼ同時併存の遺構群と推定している。その他，「道」の消滅後に構築された掘立柱建物SB－01がある。



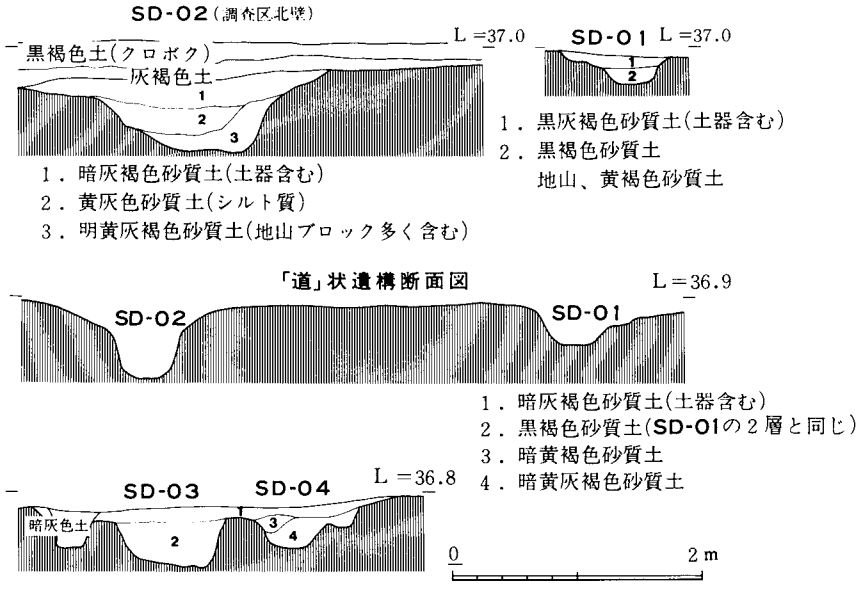
第7図　遺跡地の土地利用概念図

3　「道」

SD－01　調査区東壁から西壁まで40m以上にわたって検出した。東側は地山が高く，もともと溝が浅かったのか，削平されたのかは分からないが，部分的に途切れる箇所がある。溝底レベルは東端が36.8m，2－4区境で36.7m，36.55mと約15cmの段差があり，以西はさほど高低差なく続き，西端で36.53mを測る。幅は検出面が80～90mで緩やかに深くなり，約50cmのところから急な傾斜で掘りこまれている。深さは30cm前後で，下段までは遺物をほとんど含まない黒褐色土，上層は若干土器などを含む黒灰褐色土が堆積する。西端部では上面が長10～20cmの礫で覆われ，その付近から溝は2本に分岐している。出土遺物は少量で，第11図7，礫敷の下の溝内で出土した赤彩土師器の小片などがあるにすぎず，時期を特定するには至らない。

SD－02　4区の北壁沿いに検出された溝で，SD－01に並行する。溝底ベルは東端が36.53m，中央で36.43m，36.25mと約20cmの段差があり，西端は36.16mとなっている，幅は上面で120～150cm，緩やかに深くなり，SD－01と同様，50～60cm前後の幅となったあたりから急傾斜となる。深さは，東よりで30～40cm，西よりで約60cmとなる。埋土は，上層が暗灰褐色土で遺物を若干含み，下層は黄灰色土，最下層は明黄灰褐色土となっている，最下層は地山土混じりの土層で溝の北東側から主に堆積している。上・下層はSD－01のそれに対応するものであろう。出土遺物は上層からのものがほとんどで，第11図9・10のほか，Ⅱ$_3$期頃とみられる土師器鍋の口縁・体部小片，ほぼ同期かと思われる小甕の肉厚な丸底底部片などがある。

SF－01　並行して走るSD－01･02間の帯状の高まりを「道」と考えた。幅は西側が広く，東側はやや狭くなる。最大で3.2m，最小で1.8mである。標高は東端で36.93m，中央で36.91m，西端で36.78m。2区はほぼ平坦で4区は西へ傾斜している。「道」上では特に施設等は検出されなかったが，4区西半は側縁を除いて表面の土が土間のように堅くしまっており，遺構検出時に



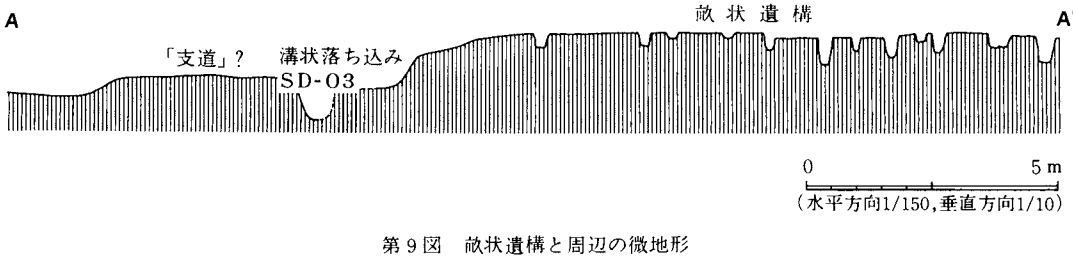
第8図　溝土層断面図

おいても上面を覆う土を容易に除去することができた。SB－01に伴う可能性もありそうだが，確実にその外へも広がっていることや，SB－01の柱穴がSF－01を覆う土層（礫群）から掘り込んでいることなどから否定できる。表面には所々にぬかるみ状のへこみ（図中の破線部分）があって小砂利や長10～20cmと大きさの揃った礫が平らに（重なりなく）敷かれたように検出された。礫は一部SD－01の上面を覆っている。

4　「畠」

溝状落ちこみ　3区中央からやや東よりにあって，SD－01とともに1区の畝状遺構を画する溝状の落ちこみである。遺構検出時はSD－01と一体のものとみられた。幅1m，長さ10mで，東側が比較的急傾斜に，直線的に掘り込まれている。西側および南端は緩やかな傾斜である。この溝状の落ちこみを境にして，畝状遺構側と西側の支道？部分とは約20cmの比高がある（第9図）。本遺構の性格は，「畠」地の区画，排水などを目的としたものであろう。

SD－03　溝状落ちこみ内にあって，北端はSD－01に接続する。長さ4.5m，幅50～90cm，深さは10～30cm程度であるが底面は平らではない。埋土はSD－01の下層と同じ黒褐色土である。出土遺物は土器片が少量で時期を特定できるものはない。



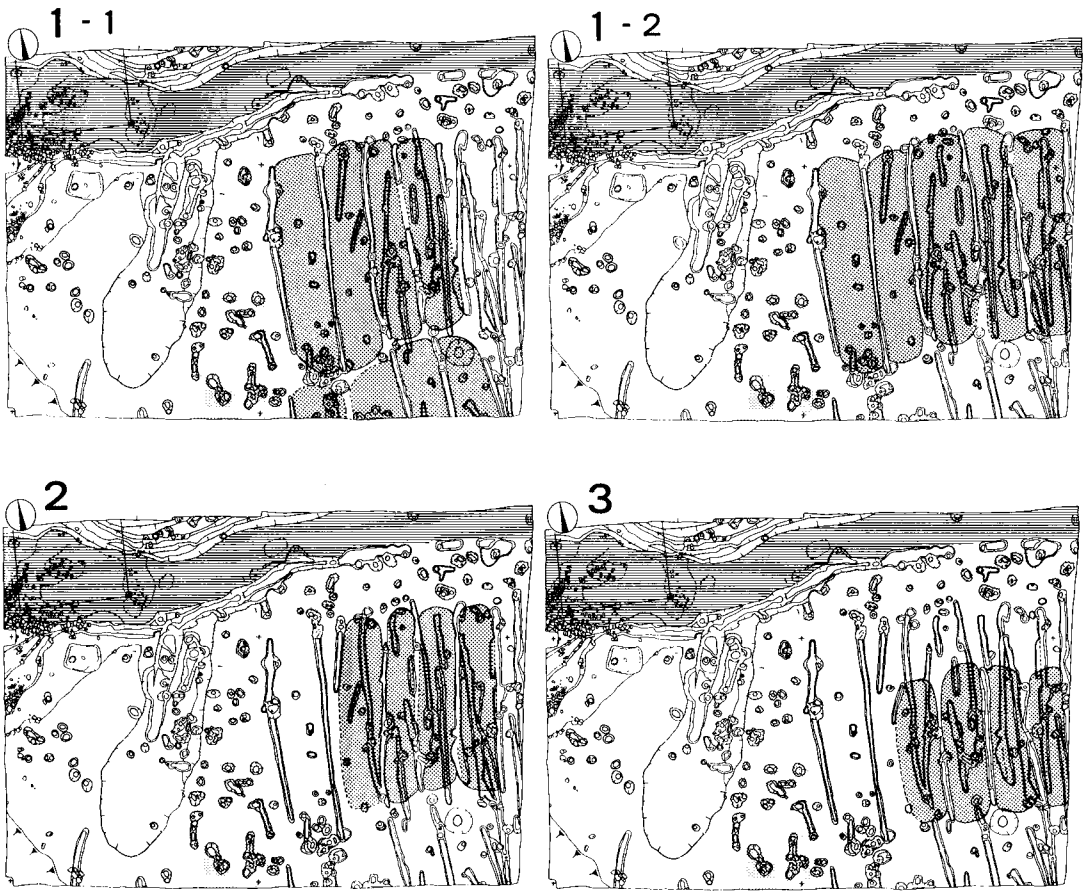
第9図　畝状遺構と周辺の微地形

SD－04　SD－03の東側に並行する小規模な溝で，幅50cm，深さ20cm。SD－01とは接続しない。出土遺物には土器片少量と鉄器片があるが時期は不明。

ピット群　柱穴様の規則的な掘り方を持つピットはなく，ほとんどが木の根跡状の不規則な凹凸を持ち，深さも様々である。ただ，その配置には，畠地外縁帯とした畝状遺構の周囲に集中する傾向が窺え，時期を示す遺物もなく，同時併存かも不明であるが，ここでは一応，畝状遺構との共存を考えて，その防風林的な役割や，食用の堅果類の樹木などがあったと推測したい。

畝（畝溝）状遺構　畝溝は南北方向に走り，幅20～30cm，深さ10cm前後が平均的である。溝底はほぼ平坦であるが，小さな穴による細かい凹凸のあるものもある。1区南側の溝の途切れる部分があって，畝の単位がそこで南北2群に分かれていた（第7図）と推定できる。北群の畝は南北は8～9mを測り，数次の作りかえにおいても基本的にその位置は踏襲されている。

畝の復元にあたっては，溝の方位・規模・間隔などを参考としたが，切り合いによる前後関係の確認のできたものはない。第10図1－$_1$は最も溝の残りのよいもので，近接した南北2群の畝が確認できる。方位はN4°E～N4°Wで，ほぼ現在の磁北方向を示す。北群は4列で，畝長は8～9m，畝幅（溝心間）は1.4～2.0mである。同様の畝幅で更に東側にその存在を認めることは



第10図　畝状遺構配置想定図　　0　10m

できず，本群は4列で完結しているものとみられる。全体での幅は7m強となる。南群は北群とほぼ方位・列を揃えて位置しており，同時に併存の可能性が高い。北群と同様4列で復元できる。1－$_2$は西から3列目の畝をやや幅広く想定してみたもので，とすると5列以上を想定することも可能であるが，東へいくほど溝の方位にズレを生じてしまうため問題がある。また，前述のとおり，南群との関係を考えると1－$_1$のほうが妥当であると考えられる。1と想定した畝群は，「畠」地の区割に最も整合した配置を示す。

2はN9°～15°Eの方位をとる畝群で，4列以上を確認できる。畝幅は1.3～1.9m，畝長は7.5～8m前後で，ともに1よりは規模がやや小さい。南接する畝は確認できず，西側も1列分の空白を残している。なお，南側は調査区南壁沿いに数条の溝があることから，北群と一定の間隔をおいて南群の畝が存在した可能性もある。また，1区と3区の境付近の南側でも，溝の規模は小さいが，2と同じ方位で幅約2mの畝が2本想定できる箇所がある。

3はN7°E前後の方位をとるもので，西から2・3本目の溝によって設定したがやや不確かである。畝幅1.5m前後，畝長は6m前後で，規模は最も小さい。

以上，大まかに3とおりの畝を想定してみたが，そのいずれにも属さない溝があることから，実際には更に多くの作りかえが行われていたと推定できる。出土遺物は，溝からは第11図13が唯一のもので，畝の時期を特定するには至らない。包含層遺物の出土状況は第1表のとおりで，やや古代前期の土器が多いという程度である。「畠」の出土遺物のみからはその時期を特定できないため，ここではSD－01・02（「道」）との配置関係からそれとほぼ同時期ととらえ，古代前期に属するものと考えておきたい。1－$_1$で想定した畝のあり方，および「畠」地における畝と外縁帯のあり方は，本遺跡の調査で明らかとなった大きな成果で，「畠」の一類型として設定できよう。ただ今回は，宅地との関係が不明確で，これが居住域の一区画にすぎないのか，それともそこから独立した生産地であったのかは大きな問題である。

5　掘立柱建物

SB－01　4区西側で検出したもので，柱穴はSF－01が若干埋まってから掘りこまれている。桁方向は不明だが，梁間2間の南北棟とみられる。桁柱間は西側で270cm，梁柱間は220cm等間である。柱穴は径25～40cm，深さは40～50cmの素掘り。柱穴からの出土遺物はない。時期は，柱穴が素掘りの小規模なものであること，遺構の重複ではSF－01より新しいことなどから，周辺の包含層遺物の主体である古代後期，Ⅵ$_2$～Ⅵ$_3$期前後のものと推定しておく。

第4章　遺　　物

1　調査区の遺物出土頻度

本調査区315㎡で出土した遺物はコンテナ1箱分である。通常の遺物の出土量からみれば少ないと言えるが，それは本調査区の大半が，居住域，すなわち遺物の主体である土器等の消費の場ではなく，「畠」，「道」であるという遺構の性格によるものであろう。

遺物の取り上げは，遺構以外のものを10mグリッドを基本とした1～4区ごとで行っており，したがって遺物の分布状況の把握は大ざっぱなものとならざるをえない。しかし，幸いにもある程度遺構の分布を反映したグリッドであったため両者の関係は把えられるものと思う。1区は畝状遺構，2区は「道」の東半部と畝状遺構の外縁，3区は畝状遺構外縁から溝状落ちこみ，支道？，4区は「道」の西半とSB－01に対応する。

全体では332点（土器破片数）が出土し，1㎡あたりの出土点数は1.05個となっている。各区の出土頻度をみると，3区と4区がともに1.9前後（3区の出土量は4区と接する北半が圧倒的に多い）で，2区はその⅓～¼程度，1区は更にその¼と低くなっている。ちなみに須恵器の各区の出土頻度の割合をみると，ほぼ同様の比率であることが分かり，全体の比率はほぼ古代の土器の出土傾向を反映したものと言える。

遺構との関係では1区の頻度の低さは，畠地という性格に符合するとみられ，2区が若干高いのは，「道」という面をどれだけ評価できるのかは分からないが，人の往来のあるところではそれだけ「物」が捨てられたり，移動しやすいという一般論をあてはめて考えることも可能である。4区においても，古代前期の遺物の出土頻度の高いのは同様の理解ができるものと思う。古代後期の遺物は東側の1区，2区にはほとんどなく，北西よりの3区，4区に多いが，これは該期の建物とみられるSB－01，すなわち居住域周辺であることによるものであろう。また，1，2区において，古代後期の遺物の少ないのを積極的に評価すれば，SB－01が古代後期の建物で，そ

第1表　出土土器の分布

全体 332点/315㎡　(1.05)

4区 48㎡	92 (1.92)	土師質 68	縄文 0 古代前期 10 古代後期 16 中世 0	2区 55㎡	31 (0.56)	土師質 22	縄文 7 古代前期 3 古代後期 1 中世 0
		須恵器 24 (0.50)	古代前期 4 古代後期 2			須恵器 9 (0.16)	古代前期 3 古代後期 0
3区 104㎡	193 (1.86)	土師質 144	縄文 4 古代前期 14 古代後期 30 中世 2	1区 108㎡	16 (0.15)	土師質 15	縄文 5 古代前期 4 古代後期 0 中世 0
		須恵器 48 (0.46)	古代前期 3 古代後期 7			須恵器 1 (0.01)	古代前期 0 古代後期 1
		青磁 1					

（計測は破片数による。カッコ内の数字は㎡当たりの出土点数。時期の内わけは識別可能なもののみで行った。）

の時期には前期の「道」,「畠」という土地利用形態が崩壊していたという点を裏づけるものとみることもできる。

2　縄文時代

縄文時代に属するとみられる遺物には，若干量の土器片と打製土掘具７点がある。第11図５は体部に横方向の条痕を施す土器で，外面にはスス状の炭化物が厚く付着している。胎土はガラス質の微細鉱物を含むややザラついた質感のもので，S（0.5㎜未満）の海綿骨片を少量含む。砂はやや不均質な角のM（0.5㎜～２㎜）砂を中量含む。色調は赤褐色。そのほか条痕を施した体部の破片が１・２区より散発的に出土しており，時期を特定できるものはないが，いずれも晩期に属すると推測できる。

打製土掘具は，各区とも２点程度と分散的に出土している。石質は手取川扇状地に通有のもの（藤1985，1988）で火山礫凝灰岩･角閃石安山岩が多い。河川によって運搬された転石を至近の地で採取したものであろう。その他，長23～24cm，幅10cm程度の自然礫２点が出土している。ともに縦長の板状石材を剝離したような面を２面持ち，石質も打製土掘具にみられるものと同じである。また，同様の石質で，約３～10cm程度の打ち割られたような石片が，３・４区を中心に約30点出土した。明確な証拠はないが，これらを打製土掘具の製作にかかわるものとして，その可能性を考えておきたい。

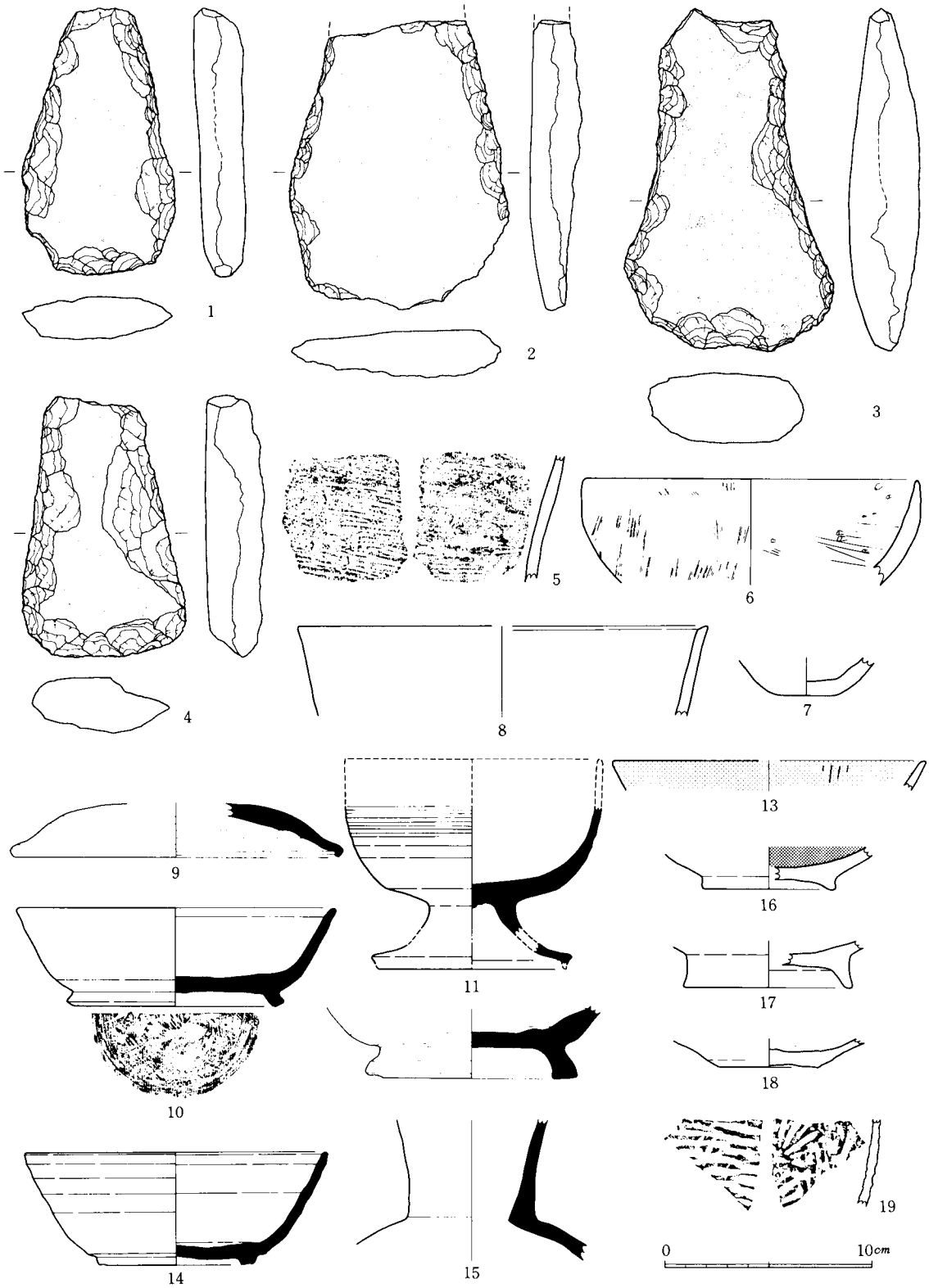
第２表　打製土掘具一覧表

挿図番号	出土地点	遺存状態	石　質	長さ	幅	厚さ	重さ
第11図１	４区、SD－01上面	完　形	?	13.0	7.5	2.5	308.3
第11図２	２区、P－７	頭部欠	火山礫凝灰岩	(14.2)	10.8	2.5	(434.7)
第11図３	１区、P－３	完　形	角閃石安山岩	16.9	10.2	3.5	600.0
第11図４	４区、SD－02上層	完　形	玢　岩	12.8	8.0	2.8	345.5
	３区、NE隅	頭部片	?	(6.9)	(7.2)	(2.1)	(128.2)
	２区	頭部片	角閃石安山岩	(6.8)	(7.2)	(1.4)	(91.8)
	３区	頭部片	火山礫凝灰岩	(6.1)	(6.1)	(2.7)	(109.8)

〔単位はcmおよびｇ。（　）を付したものは現存値を示す。〕

3　古代前期

６～８は所属時期不明のものである。６は２区のP－８出土で，口径16.0cm，肉厚な作りで椀形を呈する。火にかけられたようで外面には煤状の炭化物の付着と赤化が認められる。調整は内外ともケズリ状のハケ。色調は黄褐色。素地は５の条痕の土器と似る。混和砂は亜円～円のL（２㎜以上）砂を中量含み，堆積岩の多いのが特徴である。７は４区のSD－01上層出土の小底部片で器種不明。色調は外面が黄褐色で内面は赤褐色。素地は粒子の細かい滑らかな質感のもので，肉眼で見える骨片はない。亜円～円のM～L砂を多量混和する。堆積岩が目立つ。８は素縁の口縁部で端部は内傾ぎみの面を持つ。１区出土で器種は不明。内外ともナデ調整。色調は黄褐



第11図　出土遺物実測図

色～赤褐色。素地は7に類似し，砂は亜角のM砂（細かめ）を少量混和する。6・7は一応，7世紀代の在来系の椀を考えたが確かではない。

9はSD－02の上層から出土した杯BI蓋である。1/5程度の遺存で復元口径は15.8cm。内外ともロクロナデ調整。口縁端部は内側に強いロクロナデを加え，断面三角形を呈する。色調はクリーム灰色。重ね焼きの痕跡（北野1988a）はA-2でI類である。胎土・調整等から押水・高松窯跡群産とみられ，時期はⅣ期（田嶋1988，以下同様）に位置づけられる。10はSD－02上層出土の杯Bで，底部は約1/2遺存する。口径は15.4cm，器高4.9cm，外傾度59°。断面矩形のふんばった高台が特徴的である。外底には「×」のヘラ記号（ないしはヘラ描き文字），板目状の圧痕（工具）が認められる。内底全面，口縁端から内面へ約1cmの範囲，高台畳付はともに滑らかとなっており，使用痕（木立1988）とみられる。色調は青灰色。胎土から能美窯跡群産とみられ，Ⅱ3期と考えられる。特徴的な高台は来丸サクラマチ3号窯，同1号窯（高橋1975）に類例がある。11は台付鋺で，遺存状態は台基部が完，端部少片，鋺部約1/4である。調査区の北側，2区から4区にかけて出土している。口径，器高は推定でそれぞれ12.5cm，10cm前後とみられる。調整は鋺部上半をカキメとし，他はロクロナデとする。色調はくすんだ青灰色で，断面はやや酸化状態の赤味を帯びる。鋺部内面に降灰のあることから正位の蓋なし状態（の器種として）で窯詰めされ，白色粒（長石？）の発泡によるように，かなりの高温焼成がなされたものと考えられる。胎土は，仏器的器種のためか砂粒の混和の少ない無調製に近いものであるが，能美窯跡群産の可能性が最も高い。時期はⅡ1～Ⅱ2期。12は長頸瓶の底部で，3～4区境のSD－01が二段に分かれる部分の落ちこみ肩部から出土した。底部のみ完形。側底部ロクロケズリ。高台は高く大きくふんばった形状を示すが，畳付が内側で爪先立つような北陸での一般的特徴を有していないのが特色である。長頸瓶での類例は，篠原遺跡（田嶋・戸澗ほか1987）8号土坑などにみられる。底部内面には径4.5cmの厚い自然釉が中央からややずれて付着している。側底から高台外面の自然釉及び器表面の状態からみて，火前と反対方向にズレていることが分かる。製品自体が奥へ傾いたか，体部上面の火前の方が焼きゆがんだかしたためであろう。底部内面の厚い自然釉，若干の焼きゆがみからみて，壺瓶類の一般的傾向と同様に，焚口に近い位置で焼成されたと推定できる。色調は淡青灰色，断面クリーム灰色である。胎土は能美窯跡群産と推定でき，時期はⅡ3期～Ⅳ期の中で考えられる。13は土師器椀の小片で，1区東壁より2本目の畝溝より出土した。内外面とも赤彩し，内面には3～4mm間隔で正方斜とみられる暗文がある。色調は橙色系。胎土は目立つ砂粒はほとんどなく，若干の酸化粒が認められる。後者は色調を考えあわせると胎土の調製材の可能性がある。能美窯跡群産とみられ，Ⅱ3期～Ⅲ期のものであろう。

4　古代後期

14は3区，4区境のP－13から18点の破片で出土した。遺存率は約1/2。器種は杯BIで，口径14.6cm，器高5.6cm，外傾度59°。薄手の作りで内湾して開く体部と径の小さい底部に扁平な高台をもつ。口縁内面1cmが平滑で使用痕とみられる。色調はくすんだ青灰色。焼きは良好。重ね焼きの状態は観察しにくいため，蓋なしで同一器種の積み重ねをしたかどうかについては分からな

い。胎土は角Lの長石・石英を多量に含む，押水・高松窯跡群産で，時期はⅥ$_1$～Ⅵ$_2$期頃とみられる。15は3区北西寄りから出土した長頸瓶で，図示部分約¼遺存のほか体部片3片がある。口頸部は肩部の上へのせて接合する。色調はくすんだ青灰色～暗青灰色で，焼き，胎土ともに14に類似する。押水・高松窯跡群産でほぼ同時期のものとみられる。16は4区出土の黒色土器椀Bで，約⅓が遺存する。高台の先端は磨耗しており定かではない。色調は白色系。胎土は素地にMの骨片を肉眼で2点確認できる。砂は1㎜以下のものを中量含むが，さほど粒が揃わず，石英粒が目立つ。その他，カクセン石，黒雲母が確認できる。金沢市末窯跡群周辺から押水・高松窯跡群の可能性が考えられるが，胎土からは後者の可能性が高い。17は3区北西と4区から出土した椀BI（ⅢB？）で，約¾遺存する。高台は若干先細りでふんばり，先端は内傾する面をもつ。外底は糸切り後ロクロナデ，内底にはカキメ状の調整工具痕が残る。色調は橙色系で，胎土に含まれる多量の赤色酸化粒（ないしは焼土塊）によって発色調製されたとみられる。胎土はM～Sの骨片を多量含む素地で，酸化粒の粉末以外の混和材は肉眼では観察・識別できない。これは安養寺遺跡群（中島1975）において，Ⅵ$_2$期以降に出現する特徴的な胎土（北野1988b）と共通する。18は3区北西より出土の椀AⅡで，約½が遺存する。底部は糸切りママで，径は4.8㎝と小さく器高の低い小皿に近い形態かと思われる。色調，胎土の特徴は17と同様である。時期はⅥ$_3$期～Ⅶ$_1$期頃とみられる。19は3・4区境から出土した長甕の胴部片である。内外ともタタキ痕があり，外面は平行線文d類（花塚1984），内面は扇形（放射状）文で木目が弧を描くことから，同心円文b$_1$類（内堀1988）ないしはb$_2$類のような木取りとみられる。色調は黄褐色系。胎土は細かい酸化粒と黒雲母を含むが，混和したとみられる砂は確認できない。Ⅶ$_1$期前後に属するものか。

引用文献

北野博司　1988a　「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

北野博司　1988b　「土師器の生産と供給」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

木立雅朗　1988　「須恵器の使用痕について」（第28回市町村職員等研修会資料）

高橋　裕　1975　『辰口町来丸サクラマチ古窯』　石川県教育委員会

田嶋明人・戸澗幹夫ほか　1987　『篠原遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人　1988　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

中島俊一　1975　『安養寺遺跡群発掘調査概報（安養寺・柴木・部入道地区）』　石川県教育委員会

花塚信雄　1984　「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』
金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・名鉄北陸開発株式会社

内堀信雄（花塚）　1988　「須恵器甕にみられる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

藤　則雄　1985　「石器の石質とそれに基づく石器圏」『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（Ⅱ）』
石川県立埋蔵文化財センター

藤　則雄　1988　「辰口西部遺跡群出土石器の石質と考察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター

第5章　若干の検討

1　縄文土器・打製土掘具の出土頻度

山本直人氏は，扇状地上の縄文遺跡について，打製土掘具・遺跡の調査面積・縄文土器の3者の検討から，2類型を設定し（山本1988），特にⅡ類とされた，広範な地域から散発的に打製土掘具・縄文土器が出土する遺跡については，生業の面からその性格について論じられている。本遺跡の資料についてもこの点から比較検討してみたい。

本遺跡では打製土掘具7点，縄文土器口縁部片数1点である。打製土掘具1点あたりの調査面積は45㎡，縄文土器口縁片1点あたりの調査面積は315㎡となる。この数字は，調査面積が小さく，資料数も少ないことから不安定なものであるが，一応はⅡ類の遺跡であることを示すといえる。その中では，同様の遺跡である辰口西部遺跡群の打製土掘具が120～160（㎡/打土数）程度であるのに対して，本遺跡ではその頻度の高いことが注目される。しかし，集落遺跡とみられる岩内遺跡ハチマンダ地区や長竹遺跡の例は6～8（㎡/打土数）となっておりかなりの差が認められる。

大まかにⅡ類と捉えられる遺跡においても，その内部の状況は一様ではなく，地形や植物相などによってより使用頻度の高いところでは出土数の多いことが予想できる。辰口西部遺跡群について，山本氏は，ある時期には「根茎類・球根類の採集・加工を主たる生業とする短期居住的集落」であったろうし，また別の時期には，「単に根茎類・球根類を採取するためだけに極めて短期間営まれた遺跡」であったと推測されている（山本1988）。打製土掘具が通常，集落内において製作・管理・廃棄されるならば，その出土頻度はⅠ類が最も高く，次にⅡ類でも前者が高く後者が低いということになろう。本調査区内は，土器の出土点数や遺構からみて，「短期居住的集落」（概念規定や具体例の検討が必要）とは言いがたく，むしろ後者に近いと推察される。それにもかかわらず比較的打製土掘具の頻度が高いことを解釈すれば，調査区に隣接して「短期居住的集落」が存在したか，本地区が根茎類・球根類の豊かなところでその使用頻度が高かったということになるが，いずれかは周辺部の状況が不明確な中では決められない。

その他，本調査区で出土した打製土掘具様の石材・石屑について，その製作が主にⅠ類遺跡で行われていたのか，それを基本としながらもⅡ類遺跡でも行われたのかが問題で，特にⅡ類の後者の場合においても随時製作することがあったのかは今後検討されなければならない。

引用文献　山本直人　1988　「縄文土器・石器」『辰口西部遺跡群Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

2　古代土器の供給圏

本遺跡出土の古代の土器（須恵器・土師器）の供給地を，胎土の肉眼観察と器形の特徴から推定してみたい。ここでは，胎土の分類方法が確立されているわけではないが，須恵器については，周知の窯跡群においての胎土の差は勿論，同一窯の同一操業においても胎土差が認定されつつある中で，体系的な分類基準は今後の作業となるが，消費遺跡出土品を参考にしながら，それらを

越えた共通性，相違性のレベルで分類を行った。地質差に起因する粘土差，混和材の伝統などである。

須恵器は個体識別を行ったところ24個体が確認できた（第３表）。そのうち古代前期と認定できるのは８個体で，胎土はＢとＤで占められる。時期不明で古代前期の可能性の強いものの中にＡがわずかにある。古代後期はＡとＤがある。資料数は少ないが全期では，Ａ：Ｂ：Ｃ：Ｄは２：５：１：２程度となる。ちなみに，８世紀末～９世紀前半の横江庄遺跡では，Ａ＋Ｂ：Ｃ：Ｄが６：１：３となっている（吉岡1983）。

手取川扇状地（石川平野）の須恵器の「複数産地の製品よりなる寄せ集め的」（吉岡1983）な供給状況は，三浦遺跡中層や横江庄遺跡など８～９世紀の資料で確認されているが，同様のことは，松任市法仏遺跡，同北安田北遺跡，本遺跡（国道バイパス調査区）の７世紀末～８世紀初頭を中心とする時期においても，また安養寺遺跡群（中島ほか1975）の10世紀代の資料（北野1988）においても追認することができる。本調査区出土資料もこれに矛盾するものではない。なお，古代後期にＢがないのは，本遺跡の主体である10世紀代に，すでにＢの窯跡群が基本的には須恵器の操業を行っていないからである。

土師器の供給は，在来型土師器生産のシステムが大きく変容して以後の８世紀後半～10世紀代までは，須恵器の供給圏のあり方が参考となるが，それ以前と以後のあり方は不明な点が多い。本調査区出土資料は，量的に少ないばかりか，時期を特定できるものがわずかのため，この問題の検討にはたえないとみられるので，二，三気づいた点を指摘するにとどめたい。

古代前期に属するとみられる赤彩土師器は，５片４個体があって，Ａが１，Ｂが３個体である。古代後期のⅥ期の黒色土器は２点２個体があって，ともにＣ～Ｄである。その他，個別遺物の説明の項でも述べたとおり，Ⅵ～Ⅶ期の土師器食膳具には安養寺遺跡群に特徴的な胎土と同様のものがあって，本遺跡においても該期には主体を占める。安養寺遺跡群でみられた10世紀半ば前後を画期とする供給圏の変質（北野1988）は，本遺跡においても同様に起こっている可能性が強い。

引用文献

北野博司　1988　「土師器の生産と供給」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

中島俊一　1975　『安養寺遺跡群発掘調査概報（安養寺・柴木・部入道地区）』　石川県教育委員会

吉岡康暢　1983　「北陸初期庄園遺跡の考古学的検討」『東大寺領横江庄遺跡』
松任市教育委員会・石川考古学研究会

第３表　須恵器の個体識別と産地

	時期	胎土	器種	遺存部位			
1	前	D	杯B蓋	天井～口縁部			
2	前	B	杯 BI	口縁～底部			
3	前	B	杯 A	底体部			
4	前	B	台付鋺	体～脚部			
5	前	B	長頸瓶	底部			
6	前	D	壺瓶類	底部			
7	前	B	短頸壺	口縁～底部片			
8	後	D	杯 BI	口縁～底部			
9	後	A	盤 A	底体部			
10	後	D	長頸瓶	口頸～体部片			
11	?	A	杯B？	体部小片			
12	?	B	杯 A	底体部小片			
13	?	C、D	杯 A	底体部小片			
14	?	A、B	杯A？	口縁部小片			
14	?	A、B	杯A？	口縁部小片			
16	?	A、B	杯 A	底体部小片			
17	?	C	壺瓶類	体部小片			
18	?	A、B	壺瓶類	体部小片			
19	前	B	大甕	口縁、体部片	平c	同a？	
20	?	A、B	大甕	体部片	平a	同？	
21	?	B	甕	底部片	平？	同？	
22	?	B	甕	体部片	平a	同b	
23	?	A？	甕	底体部片	平a	同c	
24	?	C、D	甕	体部片	平c	同a？	

凡　例

1　時期 … 前は古代前期，後は古代後期，？は時期不明

2　胎土 … A－南加賀窯跡群 5.5個体（23%）
B－能美窯跡群 11.5個体（48%）
C－末窯跡群 2個体（8%）
D－押水・高松窯跡群 5個体（21%）

3　甕類の平a，同aは内堀（1983）による，内外面の平行線文・同心円文それぞれの叩き目文の分類。

3　畝状遺構

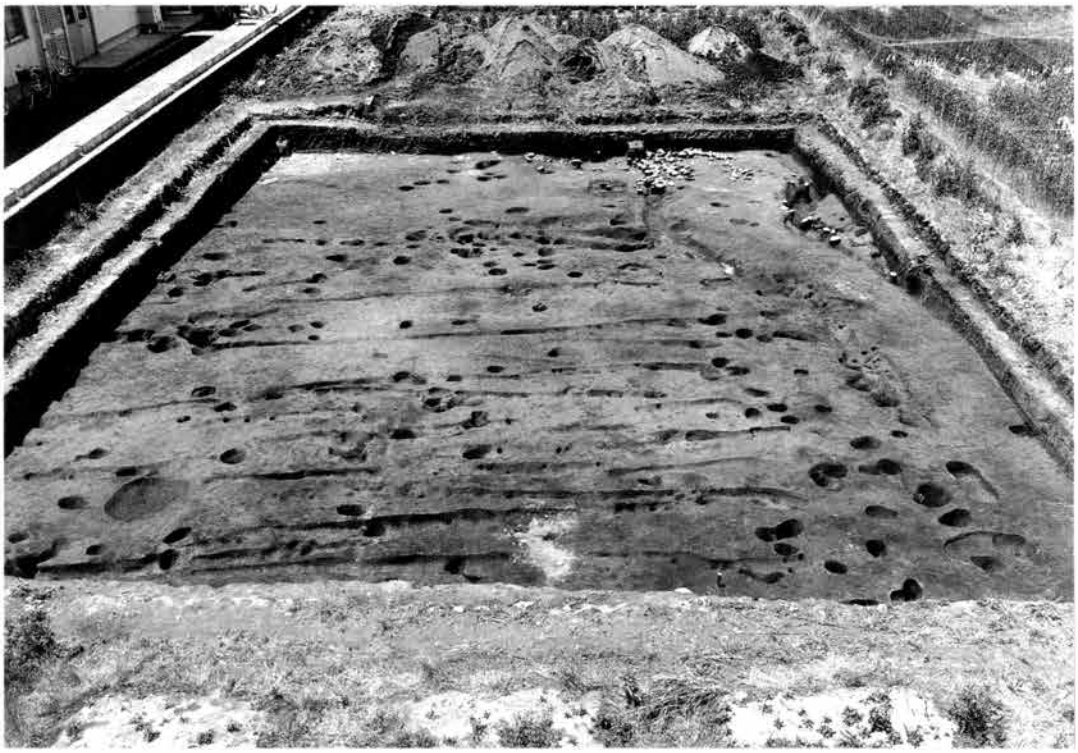
石川県内では，耕地とみられるこの種の遺構は，扇状地を中心として段丘部や砂丘で多く検出され，時期は古代～近代と幅広い。一方，大和盆地や山城乙訓郡の例では，中世に入ってから低地を中心として出現・急増することから，「中世素掘り小溝」（今尾1981），「中世小溝群」（山中1988）などと呼称され，水田裏作のウネ跡（今尾1981），水田における夏期の畑作跡（八尾1986）という意見がある。乙訓群の例では，M類とされる条里型地割の長地の½にあたる5.5mを基本単位とするものと，それより狭い間隔のS類があって，それぞれ桂川の氾濫原，下位段丘・扇状地と立地に対応することやその他のことなどから，前者を水田畦畔に伴うもの，後者を畑作の畝造成に伴うものとしている（山中1988）。新潟県子安遺跡や一之口遺跡の例では，群馬県の例や立地などから畠と推定し，建物群を伴うことから「園宅地」の実例ではないかとみられている。更に，この種の遺構が9世紀前半～10世紀前半に多くみられることから，遺跡分布のあり方ともあわせて，平安初期～中期を開発史上の大画期と評価している（坂井1986）点は重要である。

本遺跡の例は，扇状地扇央部という立地や微地形（第9図），溝間距離，小ピット群のあり方などから「畠」とするのが消極的根拠ながら最も妥当と言えよう。溝間距離は，1.7m前後が平均的であるが，同様の立地にある松任市上二口遺跡（中島1982）や辰口町辰口西部遺跡群（北野ほか1988）でも1.6～1.8m前後が主体で，その数字には一定の統一性がある。畝の単位は4本で長8m前後を想定したが，前記2遺跡では，長さは長いものはあるが，最小単位としての畝列を3～5本程度と捉えられる例が多い。畝状遺構と建物群の関係については，調査区の中では明らかにできなかったが，「畠」が一定の土地区画の中に計画的に造成された可能性は認められる。手取川扇状地上での畝状遺構の初現は，今のところ8世紀後半で，東大寺領幡生庄の推定地，辰口西部遺跡群において確認でき，上二口遺跡や本遺跡の例もそれを前後する時期におさまる。坂井氏が指摘するように，集落分布と同様，開発の進捗状況を示すものとして興味深い。

耕作関連の遺構にはその他，時期は下るが，沖積地や扇端の地下水自噴地帯などで，1m前後の幅広の溝を伴う例（戸水C遺跡，北安江遺跡，八田中遺跡）があり，また水田の湛水防止や土壌酸化・活性化の溝切りの例の存在も予想されることから，個別の立地や形態を踏まえた性格付けが必要である。畝状遺構は，溝の掘削方法（農具）や水田・建物群との関係，栽培植物などを明らかにしていくことによって，当時の農業経済の一端を解明する上での好資料となろう。

引用文献

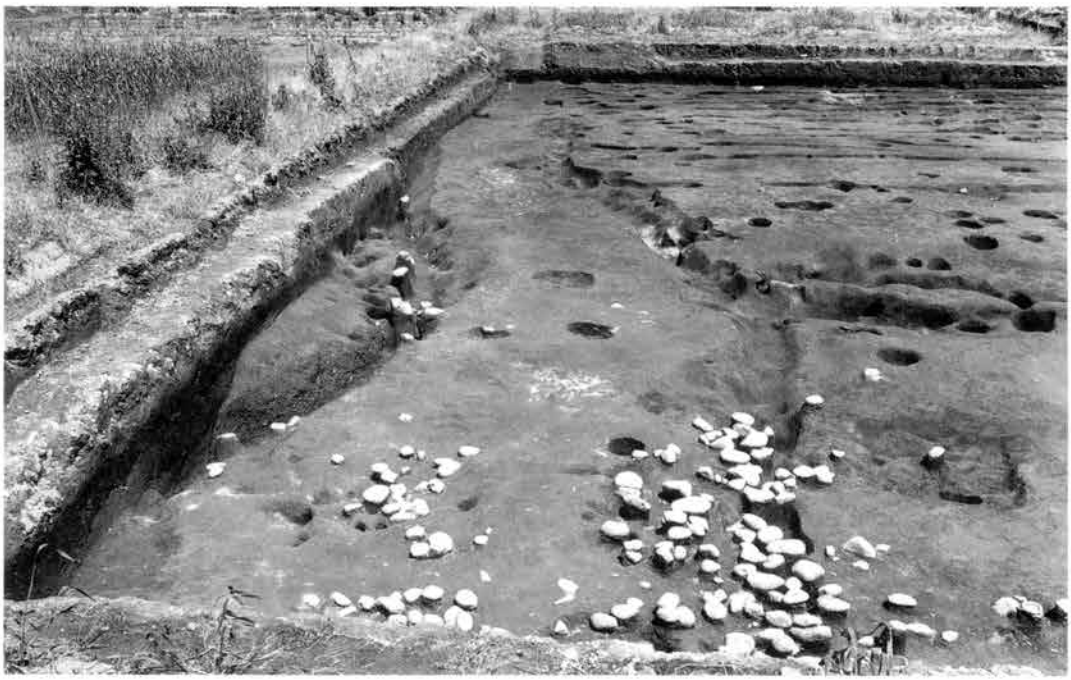
今尾文昭　1981　「『中世』素掘り小溝についての一解釈」『青陵』　奈良県立橿原考古学研究所
八尾博之　1986　「中近世素掘り小溝について」『矢部遺跡』　奈良県立橿原考古学研究所
山中　章　1988　「長岡京廃都以後の土地利用（下）」『研究紀要』第3号　向日市文化資料館
坂井秀弥　1986　「畝状小溝」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書　一之口遺跡西地区』　新潟県教育委員会
北野博司ほか　1988　『辰口西部遺跡群Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター
中島俊一　1982　『松任市上二口遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター



全　　景（東から）

全　　景（西から）

図版2



「道」状遺構（西から）

同　上（東から）

「道」から「畠」を望む　（西から）

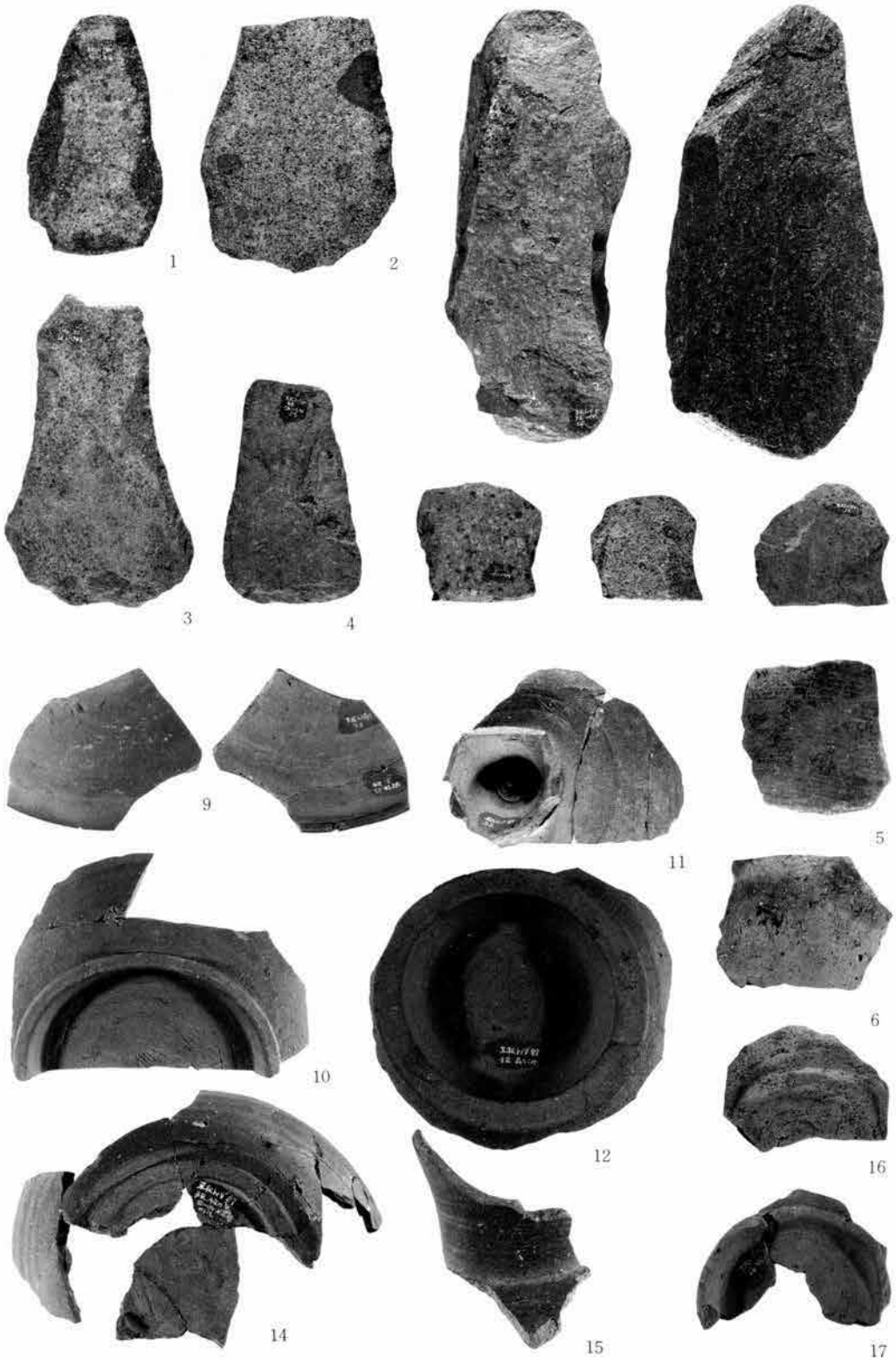
作　業　風　景　（西から）

図版4

遺　構　検　出
（南から）

打製土掘具出土状態
（東から）

遺跡付近の表土厚
（東から、末松地内の国道バイパス建設工事現場にて）



出土遺物（番号は第11図に対応）

末　松　遺　跡

石川県農業短期大学附属農業資源研究所
増築等工事に係る埋蔵文化財調査報告書

平成元年　3　月　20　日　印刷
平成元年　3　月　31　日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　㈱ 共 栄